
心の奥の扉の先の可能性

天衣無縫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の奥の扉の先の可能性

【Nコード】

N5172Y

【作者名】

天衣無縫

【あらすじ】

生まれた日も生まれた病院も育った町も同じ。家も隣同士。そんな二人の成長を描く純愛ラブ話。『いつかきつと見つかるよ自分の可能性が』『時間はかかるけどな。でも絶対見つかる。俺たちが証明するよ。』

主に小学編、中学編、高校編に渡って描きたいと思います。尚、感

想や評価、お気に入り登録などぜひよろしく願います！

エピソード

七月七日。とある町のとある病院で一つの産声が上がった。

元気な男の子だ。

そしてそれを追いかけるかのように一時間後別の病室で産声がある。

今度は女の子。

時期が近いこともありその二人の赤ん坊は同じ病室になった。

互いの親は家が近い、というか隣同士のため関係は親密だった。

一週間後名前がつけられる。

男の子の名前は

『沢村 尋音』
さわむら ひろと

女の子の名前は

『桜井 渚』
さくらい なぎさ

それが二人の出会いだった。

第一話 お隣さん ―尋音目線―

俺は沢村 尋音。今日から小4になる！

俺の兄貴は七つ離れていて高校生。去年は一年生でインターハイ出たんだ！

ちなみにテニスね。

絶対本人には言わないけど兄貴に憧れて俺もテニスをするんだ！
近くのテニスクラブの入団条件が小4以上だったから今年からやっ
と入れるんだ。

「尋音ー？なにそんなにはしゃいでるの？」

今声をかけてきたのは桜井 渚。すぐ隣に住んで窓から少し大きな
声を出せば聞こえるくらいの距離だ。

「あー渚！だって今日から四年生だぜ？嬉しいじゃん！」

「尋音って単純だねー」

「純粹って言えー。今から迎えにいくぞ？」

「うん！」

渚はクラスの中でもかなり可愛い方だと思う。俺の友達の中でも渚

を好きな奴って結構いるし。

「じゃ行ってきまーす!」

「気をつけなよー」

おれん家は俺、兄貴、母さん、父さんの四人家族だ。

朝は兄貴と父さんは俺よりも先に出てく。

そして走って十秒の渚の家のチャイムを鳴らす。

「あ、尋音くん。ちょっと待っててね・・・渚ー!?!」
「今行くー」

「毎日ありがとね」

「いや俺も一人じゃ寂しいから」
「ふふ。」

少し待つと二階から渚が降りてくる。

「お待たせー」

「おー。じゃ行こうぜ。おばさん行ってきます!」
「行っただけじゃい」

おばさんに手を振って学校へと歩き出す。

「尋音もテニスクラブ入るんでしょ?」
「おう!あ、渚もどうだ?」

「私はあんま運動得意じゃないから・・・」

「ものは試しだよ今週末だから一緒に行こうぜ」

「ま、まあ見てみてからね」

「よし！あ、誠司ー！」

誠司、空野そらの 誠司せいじは同じクラスの親友だ。

「あ、尋音おはよう」

「誠司もテニスクラブ入るんだよね？」

「うんボクも行くよ。渚ちゃんもおはよう」

「はあはあ尋音早いよ」

「あははホントに体力ないな」

「もーだから言ってるじゃん！」

「楽しそーじゃん」

「あ、月海おはよ」

月海こと、吉高よしたか 月海つぐみもクラスメートだ。

この四人が最近一緒にいるメンバーだ。

始業式も終わり、帰りも同じ、渚と帰る。

「渚？今日はそちの家いつていい？」

「あーでも美咲いるよ？」

「いいよ全然」

「うん・・・」

「じゃ、ランドセル置いたら行くから」

ダッシュで部屋に行ってランドセルを投げて一階に降りる。

「渚ん家行ってくるー」

「由希ちゃんによろしくー」

「はい」

由希ちゃんとは渚の母さん。

今度はチャイムを鳴らさずに入る。

「おじゃましてーす！」

「あら、尋音くんいらつしやい」

「あ、おばさん、母さんがよろしくだつて」

「希ちゃんが？ならちよつとおじゃましてこようかしら」

階段を登ってすぐ右、そこが渚の部屋だ。

「入るよーっておい」

部屋に入ると渚が妹の美咲とケンカしていた。

「美咲ー！」

「やーだー！」

何やらおやつを取り合いをしているみたい。

「ケンカすんなー」

「あ、ヒロ兄ー！ナギ姉がー！」

「違うもん！それ私のだもん！」

「いいじゃんか、お姉ちゃんなんだろ？」

「えへへーヒロ兄大好きー」

「カンケーないもん！」

美咲は俺たちより五歳下、幼稚園の年中だ。

「渚にはあとでコンビニ行つてなんかおごるからさ」

「・・・しょうがないなあ。はい、ゴメンね美咲」

「ありがとう」

俺からしたら下に兄弟がいるのつてうらやましいんだけどなー俺末っ子だし。

それから六時くらいまで遊ぶ。普段は五時くらいまでが門限なんだけど渚ん家に行く時だけは甘くなる。

「じゃまた明日なー」

「うんバイバイ」

下に降りるとおばさんはまだいない。どうせウチでまた長話でもしてるんだろつ。

今度はおじやましましたを言わずに出る。

「ただいまー」

「尋音くんー！」

あ、あれ母さんは？

リビングに行っても母さんはいなかった。

「海斗くんが・・・」

「兄貴がどうかしたの！？」

「じ、事故にあったって・・・」

「！・・・兄貴！」

「尋音くん！」

それを聞くと俺は走り出した。病院は分かっている。この辺なら俺が生まれた総合病院だと思う。

そして病院に着いた。

第二話　なんで？　―渚視点―（前書き）

さっそく評価してくださりありがとうございます！これからよろしく願います！！

第二話　なんで？　―渚視点―

「お母さん遅いなー」

尋音が帰った後もお母さんはなかなか帰って来なかった。

「ナギ姉ーお母さんは？」

「んーもうすぐ帰ってくるよ」

この会話の繰り返し。

そしてちょうど七時をまわったときに玄関の鍵が開く音が聞こえた。

あ、お母さんやっと帰ってきたんだ！

私は美咲と一緒に玄関にダッシュ。

予想通りそこにいたのはお母さんだった。

「お母さんどうしたの？遅かったじゃん」

「海斗くんが・・・」

え？尋音のお兄さんが？

「海斗お兄ちゃんがどうかしたの？！」

「事故にあっちゃって、でも命に別状はないって、ただ・・・」

ただ？ただなに？

「もうスポーツはできないって」
「そんな・・・」

海斗お兄ちゃんは尋音の憧れでもあって、それに目標。このまま行けばプロも夢じゃない
くらいうまかったのに・・・。

あ、そうだ

「尋音は？」

「病室で海斗くんとお話してたわ・・・一緒にいたら邪魔だろうからそこでお別れしたの」

海斗お兄ちゃんはホントにやさしくしてくれて私にとってもホントのお兄さんみたいだった。

でも尋音からしたら血も繋がってる、私よりもショックが大きいはずだもん。

私が尋音を励ましてあげなきゃ！

「まだ帰ってきてないみたいだね。」

「ええ。渚、会うなら明日にしなさい」

「うん。じゃ私宿題するから。」

そう言い残して二階に駆け上がる。

あ、やっぱまだ尋音の部屋電気ついてないや。

・・・宿題しよう。

・・・・・・・・・・・・・・・・

ぎさ、渚。

「ん、むづ？」

「渚、寝るならちゃんとベッドに寝なさい」

「あ、はい」

しまったいつのまにか寝ちゃってたみたい。

お風呂はもう済ませてあるからもう寝ちやお
つかな。

「お母さんおやすみ」

「おやすみ」

そう言って目を閉じた。

チュンチュン、という小鳥のさえずりで目を覚ます・・・・・・・・
・ことができたなら気持ちいいんだろっなあ。

今日もいつもどおり、美咲が私のお腹の上に乗ってきた重さで嫌な目覚めだった・・・。

「ちょ、いいかげんおりてよ」

「ナギ姉起きたー？」

「うん起きたから大丈夫」

「じゃ、一緒にご飯食べよー」

「はいはい」

美咲に手を引かれて下に降りる。

「お母さんおはよー」

「おはよう。早くご飯食べて支度しちやいなさい、尋音くん来ちゃ
うわよ」

「うん」

食卓にはピーナツバターの塗ってあるトーストが一枚。

それを食べて、今日は尋音といっぱい話するために早く準備をする。

そしていつもより早めに家を出て尋音の家に向かう。

尋音大丈夫かなあ。泣いてたりしたらどうしよ。

そんなことを思いながらインターホンを鳴らす。

「はい、あら渚ちゃん。」

「おばさんおはようございます」

「ふふ、今日は早いね。・・・尋音ー！」

おばさんが二階に向かって尋音を呼ぶ。

降りて来た尋音はいかにも怒ってそうな仏頂面をしてた。

「おはよー尋音」

「ああ。」

え、ああ、ってなに？よっぽど怒っちゃってる？

っていうか悲しむとかならまだしもなんで怒ってるの？

第三話 恋ばな。――尋音視点――

夜の七時過ぎ。

俺は兄貴と二人っきりで病室にいた。

「おまえは頑張れよ」

「なんでだよ、なんでそんなに余裕なんだよ。」

「しょうがねーだろ？もう復帰はできないんだから。」

「ホントに諦めんの？」

「・・・ああ。」

「！・・・俺は絶対兄貴を超えてみせる」

「おまえが？ぶ、まあせいぜい頑張れよ」

「俺今週から始める。兄貴には絶対負けねえから！」

そう言つて俺は病室を出た。

途中母さんとすれ違つたけど俺は家に直行。

病院からは小学生の俺の足で走つても20分かつらずに着く。

部屋の壁に寄りかかつてるまだ新品のラケットを持って近くの公園に行った。

なんだよ兄貴のやつ！あんだけ頑張つて来たテニス奪われて悔しくねえのかよ！

怒りに任せてラケットを振り続ける。

気付けばもうクタクタになってた。

その日は風呂に入ってそのまま寝た。

次の日、いつもは迎えに行くはずの渚が今度は家に来ていた。

「おはよう」

「ああ」

自分でも不機嫌な声を出してたことには気づいてた。でもなんか落ち着けないんだよな。

渚と歩く通学路も今日はなんだかちよつと気まずかった。きっと渚も兄貴が事故ったことも、もう・・・もうテニスできないことも知ってるんだろうなあ。

「ど、土曜日頑張つてね！」

「ん、お、おう」

「私、やっぱ無理だけど見に行くから」
「そっか、ありがとな」

ちよつとぎこちないけど渚から話しかけてくれた。そうだよな、いつまでも気にしちやいられないよな。超えるって決めたんだから。

・・・もちろんその日も素振りをした。

いよいよ入団日。

まだ着慣れない新品のウェアを着て、昨日おとといと使ったおかげで慣れて来たラケットを持って近くのテニスコートへ行く。

「今日から入団します、沢村尋音です！小4です！」

「同じく、空野 誠司です」

「「よろしくお願いします」」

パチパチと拍手をされて少し恥ずかしいような気もする。

練習はまだ基礎的なもので、まずは当たり前ながら、ルールとか、あとはフォームなどを教わった。

兄貴の試合とか見てたからだいたいのルールは知ってた。でもフォームは少し崩れていて修正するのが大変だった。

こうして無事に入団することができた。

「あ、渚」

「あ、尋音。どうだった？」

「うん！楽しかったよ。」

「尋音に誠司も頑張れよー」

「あ、月海も来てたんだ」

何気にいつものメンバーが集まっててすこし面白い。

「俺腹減ったから帰るな」

「あ、じゃ解散ってことで」

「よし、じゃあ帰るか誠司」

「ちょ、月海。」

誠司が月海に引っ張られて行く。あいつらあんなに仲よかったっけか。

「海斗お兄ちゃんいつ退院？」

「ん？二週間後だつて。」

「そっか、早く良くなるといいね」

「ああ。」

「・・・あ、そーいえばね！内緒話なんだけど・・・」

渚があきらかに無理やり話題転換をした。まあ一応気遣ってくれてるんだろっし乗っておくか。

「なに？」

「月海が誠司くんのこと好きなんだって」

「ぶっ！マジで？」

だからあんなことをねえ。なるほど、面白くなりそうだ。

「でさー尋音にも協力して欲しいんだって」

「俺が？」

「うん。一番仲良さそうだしね」

「まあいいけどね。おまえは？そういう奴いないの？」

「わ、私はいないよ！」

「ふうん」

ウチのクラスで渚のことを好きな人、ざっと数えて五、六人。ウチのクラスは40人くらいで男子はその半分くらいだから、えっと約分をして・・・四分の一の奴から好かれてる。ほんと羨ましいくらいだ。

「そっちは？」

「あ、俺？・・・いない、かな」

「えーホント？」

「ホントだったの！ま、まだ小学生なんだから焦ることはないじゃん？」

「確かに・・・」

俺たちは二人とも告られたことも告ったこともない。俺が言つのもなんだけど、やっぱまだ小4なんだし、今はテニステニス！

早く試合に出れるようになりたいなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5172y/>

心の奥の扉の先の可能性

2011年11月20日05時40分発行